

《第4回 ICD特別賞受賞者》

歯科医学における足跡

ICDフェロー

森 本 基
(代) 内 田 耕 司

I. 世界保健機関関係の活動より記載する

1) WHOによる口腔保健治療に関する国際協力研究
(1973～1976)

歯科口腔保健制度を国際比較研究をする場合は日本を除いては研究にはならないとUCLAのKnutsun教授（アメリカ人で最初の公衆衛生学博士、初代のWHO口腔部門の責任者）は常に考えていた。私は以前から親しくしていた関係から私を研究者として推薦して下った可能性がある。疫学部門の日本研究班に属することとなった。結果は図1に示した出版物として世に問われた。

2) 国際研究協力（第2次）

国際協力研究の第2次として1989～1996に約20年後の歯科の状態はどのように変化したか、社会階級別

等社会学的な分析を含めて研究することとなった。日本の責任者として指名されたので、全国歯科大学の口腔衛生・予防歯科の教授に日本の若手研究者にWHOのOral Health Surveyに習熟してもらい、日本の研究は常に国際基準に則って行われるようにしたいと考えた。全国の教授連の協力を得て、日本で初めて本格的な研修（calibration）をWHOの専門官であるIngolf Moller教授によって実施された。事の重要性を説明する厚労省宮武課長と受講者全員の記念写真である（図2、3）。成果については社会に出版されている（図2、3）。成果については社会に出版されている

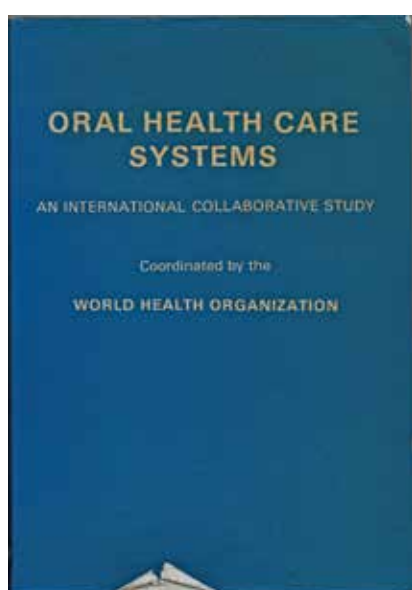


図1 第1次研究の著作（1985, UK）



図2 宮武課長の説明



図3 受講者の記念写真



図4 翻訳された日本語版（1991，東京）

ないので、花田鶴見大学名誉教授のご尽力により歯界展望に2003.4より2005.5.まで翻訳し紹介してくださった。

3) 口腔衛生専門委員

私は1983～1992までWHOの口腔衛生専門委員として任命された。日本にて必要に応じて仕事をするのが任務であるが、1989.11.6～13まで専門委員会がWHO本部で開催された。委員長Beagrieカナダ、ブリティッシュコロンビア歯学部部長、副委員長小生、委員にはGoldhaberハーバード大学歯学部部長、Smith英国シェフィールド大歯学部部長、Camaraメキシコ、メトロポリタン大学教授、Ekanakaya教授（スリランカ）等々外から10名、WHOのBarmes博士他専門職員3名で、与えられた主題、これからの時代に歯科医療内容はどのように進化していくか、そして、その場合、歯科保健医療関係者はどのように変化するか、どのように養成すべきか、の研究に取り組んだ。その成果を事務局長に報告、WHOは技術専門誌として公表、宮武課長は直ぐに翻訳を命じ、その訳本が写真で示してある（図4、5）。

II. FDI関連

世界歯科連盟への関係はFDI大会はシカゴ大会が初めてである。これもWHOの調査研究の状況を発表すべく開いたパネルディカッションであった。FDIとの



図5 1994年4月7日世界保健デー「口腔保健」中嶋宏事務局長と記念写真

関係はWHOがらみであった。

その頃のFDIの委員会は余り活発ではなかったように思っている。総会毎に開催される委員会も顔を合わせ、少々話し合う程度であった。私にとっては委員会を通じて多くの知己を得たことが幸いであった。FDIでの活動、東京大会のアジアシンポジウムの開催に大変役立ったことである。何名か示していく。池憲澤博士（韓国ICD部会設立者）、Dr.Clive.Ross（後の国際会長）、Dr.Primo Gonzales（フィリピン代表）、Dr.T.Horasut（タイ会長）、Dr.K.Saparamadu（スリランカ代表）、Dr.HJN.Fauzia（マレーシア衛生局長）等々である。

1978年スペイン大会で1983年東京大会が決定され、その後、日歯会長山崎数男がFDI会長となり1983年東京でFDI大会が盛大に開催された。その後、FDIでは鶴巻克維が理事を継続し、信頼を得てFDI会長となる。ここに至る間、鶴巻はFDI側、私はWHO側から歯科界にとっての重要な案件の調整にあたり国際歯科関係の発展に寄与したつもりである。

III. アジア太平洋歯科連盟・公衆衛生委員会

アジア地域の歯科医師会のリーダー達は大体ICDのfellowである。従って、此处で遭遇する全て仲間のような関係で、常に明るくにこやかに過ごすことができた。但し、組織は小さく財政的には決して安定ではなく、常に、運営上の雑音があった。

委員会は固定的なメンバーではなく継続的な課題は取り上げられなく、それぞれの国の抱える口腔保健



図6 アジア太平洋歯科連盟のボス達



図7 委員会風景

上の問題を提起し、それを例に議論するのが通常であった。和気あいあいのうちに会議は展開された。残念なことに、5年経過した折に事務局長の不正、内部の混乱により、この地域の活動は中止となった(図6、7)。

Ⅳ. 組織運営・会議の在り方

時代が進み、多くの事柄が簡略化されてきている。簡略化してはならない事もあると思う。FDIシカゴ大会では、宗教界の指導者が次々に祈りを捧げ、開会式は始まった。1981年4月7日世界健康デーにはWHOのマニラ事務所にいた。世界健康デーを祝うに際しマニラの大司教が祈りを捧げ、開会式は始まったのである。図8はスリランカの歯科学術大会に呼ばれて時の事である。招待された私も当然開催者と共に壇上にいた。主催は私に燈明をつけろと、目配せで指示を



図8 スリランカ学会開会式にて

した。そして、参加させていただいた。これは宗教的行いではないと後で聴かされた。日本人が何か忘れていた大事な事を教えてくれているように思えるのである。

謝 辞

この度は、第5回ICD特別賞に選出いただき、大変光栄に存じます。

ICD日本部会会長様、ご推薦くださいました先生方、事務局の皆さまに心より感謝申し上げます。

父は授賞式の予定をスケジュール帳に書き込み、楽しみにしておりましたが、1月末に永遠の安息の地へ旅立ちました。

長年にわたり携わってきた、口腔衛生、地域歯科保健の分野が国内外を問わずさらに発展していくことを、またICD日本部会のますますのご発展を祈念しております。

父に代わり、御礼のご挨拶とさせていただきます。

長女 高橋 理香